

Ⅲ-2

イヌイトとアリュートの「近代化」

—皮舟と犬ぞりを事例にして—

スチュアート ヘンリ

まえおき

文化を翻訳する手がかりとなる民具を考察する材料として、極北地帯のアリュートとイヌイト社会における乗り物の皮張り舟と犬ぞりがある。アリュートもイヌイトも荒海での航行や生業活動に欠かせなかった舟であるカヤックを作っていたが、さらにイヌイトはウミアック、そして陸上でも生業活動を行なうので、犬ぞりも使ってきた。しかし、いわゆる近代化が本格化する 1950 年代以降、流木と海獣の皮で作られていたカヤックやウミアックは、アルミやガラスファイバーのボートに取って代わられていき、カヤックは現在、スポーツの道具となっている。

イヌイト文化の象徴にもなっている伝統的な犬ぞりもカヤックと同じ運命をたどっている。

両民族はツンドラ地帯とそれに隣接する海域を生活の舞台としているが、両者の間には伝統時代の乗り物において、大きな違いがある。ここでとりあげる皮張り舟のカヤックやイヌイトのウミアックと犬ぞりを通して、アリュートとイヌイトが経験している「近代化」による道具の変化、そして道具の変化を引きおこす状況に注目して、その文化翻訳を試みる。

本論に入る前に、用語についてふれておく必要がある。まずは、ツンドラを便宜的に 3 つのタイプに分類する。一つは年間平均温度が 0℃ 以下の極北地帯に広がる温度性ツンドラである。もう一つは、極北地帯以外の高山ツンドラの温度性ツンドラである。以上の温度性ツンドラと区別されるのが、比較的温暖であるが年間通して強風の吹くアリューシャン列島の風性ツンドラである。

次に、アリュート文化とイヌイト文化に共通する「カヤック」(qajaq : kayak とも記す) は、流木の骨組みに海獣の皮を全面的に張った「覆い甲板 (closed deck)」の舟である。一方、イヌイト文化の「ウミアック」(umiaq : umiak とも記す) は「解放甲板 (open deck)」の皮舟である。

そして、「イヌイト」と「アリュート」の名称であるが、チュコト半島からグリーンランドまで広がる従来エスキモーと総称されてきたユッピク (Yu'pik) とイヌイト (Inuit) は、互いに通じない言語を話すので、ユッピク・イヌイトと記すべきであろう [スチュアート 1993]。しかし、ここでは両言語グループを便宜的にイヌイトに一括して記すこととする。

アリュートの自称はウナンガン (Unangan) であるが、政治の舞台以外、研究書や民族の代表団体の名称を含めて一般的に使われている「アリュート」という名称を使うことにする。

本論では、「伝統」とは太古以来、不変の様子があったという意味ではないことを念頭に、それぞれの地域において欧米化 (いわゆる近代化) が顕著になる前後の様子を指して使う。アリューシャン列島では、ロシアの支配が確立する 18 世紀後半まで、イヌイト社会では 19 世紀中葉までとしておく。

皮舟について

有機質の木と動物の皮で作られた皮舟は考古学遺跡に残らないので、その歴史がどこまでさかのぼるかについては諸説あり、定説はない。Johnstone [1980 : 26-43] によれば、4000 年前、あるいはもっと古



写真1 ロシアのオネガ湖の岩絵 (Johnstone 1980 : 32 による)

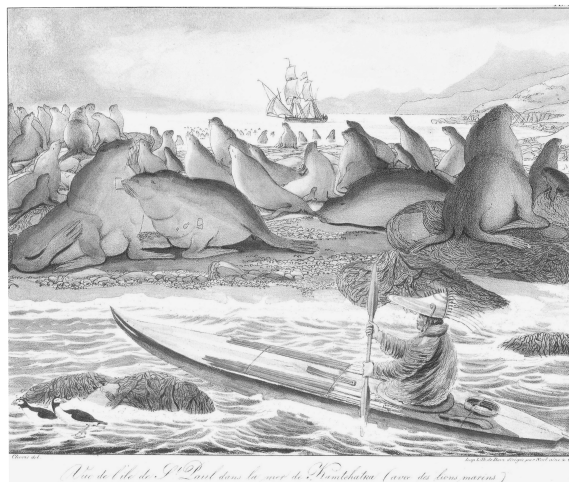


写真2 カヤックからトドを狙うアリュートのハンター (ダイソン 1992 : 2 による)

くまでさかのぼる可能性を、中央アジアや北欧の岩絵に描かれている舟が示唆している。さらに、後述するアリューシャン列島のカヤック (バイダルカ) に見られる、「割れ舳先」(two-part bow) が描かれているロシアのオネガ湖 (Lake Onega) で知られている数千年前の岩絵の分析が進めば、カヤックの歴史はより明らかになる [Johnstone 1980 : 32-33]。

アリューシャン列島のカヤック

文献ではバイダルカ (baidarka : ロシア語で「小舟」) と呼ばれるアリュートのカヤック (iquya-x : イキヤッ) の歴史はよく知られていないが、アリューシャン列島に人間が住みついたおよそ 9000 年前に入ってきた可能性があると考えられる。それは、アリューシャン列島の陸上は食料が限られているので、海上の生業活動が不可欠であったということを加味した推量である。

アリューシャン列島は北極圏より南に位置するが、300 余の火山性島々は風性ツンドラ環境であり、高木 (樹木) が育たない環境である。アリューシャン列島では、ロシア人が来る 18 世紀後半まで中・大型のほ乳類は生息せず、生業活動はほとんど海上猟に限られていた。陸上で得られる食料はわずかに鳥類とその卵およびランなどの塊根の植物食だけであった。

列島の北側を流れるベーリング海流と、南側を西進するアラスカ海流がぶつかる環境は、世界的にみてもたぐいまれな豊かな海洋資源に恵まれている。そうした資源を捕獲するために使われるカヤックは、その製造と操縦技術、そして狩猟のための多くの特徴的な儀礼と小道具が知られている。

アリュートの伝統的なカヤックは基本的にダブルブレード・パドルを使う漕ぎ手が座る単開口 (single hatch) のものであったが、18 世紀後半にカヤックを操れないロシアの毛皮商人がアリューシャン列島に入ってきてから、商人を運ぶための 3 口カヤックが作られるようになったようである。カヤック構造の詳細についてはダイソン [1992] や吉田 [1995] を参照されたいが、その概略は次の通りである。樹木が生えないアリューシャン列島では、流木で作った骨組み全体をアシカやアザラシの皮を縫い合わせて覆う構造であった。

前述した通り、アリューシャン列島では陸上の食料資源は少なく、海からの資源は存在のための必要条件であった。豊富にとれたクジラ、アシカ、オットセイ、ラッコやオヒョウ、ヒラメ、カレイ、サケ、ニシン、そして多種の海生無脊椎動物を入手するためにカヤックは必要不可欠なものであった。

アリュートのカヤックにみられたもう一つの特徴は、割れ舳先^{へさき}である。それは飾りだったのか、現代の輸送船の球状船首と同じように波の抵抗を少なくする役割をはたしていたのか、あるいは、カヤックの舳先が水面下に吸いこまれない工夫だったのか、定かではない。しかし、波はつねに数メートル、また5mを超す波もめずらしくないアリューシャン列島の海は結氷せず、そして年中、強風が吹きすさぶアリューシャン列島の海域において、カヤックの割れ舳先には実用的な機能もあったであろう。

カヤックの割れ舳先はアリュート文化ではあまねく認められるが、イヌイト文化では、アリューシャン列島と比較的に似ている海の状況の西アラスカに割れ舳先^{へさき}はあるものの、北アラスカからグリーンランドにかけては、ほとんど知られていない。図1の左側はアリューシャン列島のカヤック、右側は西アラスカのものである。

前述したように、アリュートの伝統的な生業活動の対象である海獣は、投槍器で投げた銛^{もり}で捕っていた。鯨はトリカブト（aconite）を塗った銛頭を打ち込んで、息が絶えるのを待った。岩場が上がってくるトドはカヤックを近づけて銛で捕った。

アリューシャン列島のカヤックは歴史的にどこまでさかのぼるかについて、よくわかっていないが、3700年以上前の遺跡から出土する鯨をはじめとする多くの海生ほ乳類の骨、そしてカヤックからの猟に用いられる投槍器や両端に扁平の櫂、つまりダブルブレード・パドルなど、独特な部品があるということは、考古学研究による間接証拠にもとづくと、カヤックの歴史はかなり古いといえよう。さらに、海に立脚するアリュートの経済を加味すれば、アリューシャン列島に人類が住みついたおよそ9000年前からカヤックがあったのではないかと考えられる。

イヌイトの皮舟

イヌイト文化では、カヤックのほかに、アリューシャン列島ではほとんど知られていないウミアックという解放甲板の舟が、海上猟のほかに、キャンプを移動するときの運搬などに使われていた。アリュートと同様にカヤックは男性が使うものだったが、ウミアックは猟以外の場合、女性も漕いでいた。

イヌイトのカヤックはアリュートのそれとほぼ同じ構造だったが、割れ舳先は西アラスカ以外、知られていない。それは、北極地帯は夏でも叢氷^{そうひよう}があるので、海はアリューシャン列島よりも比較的穏やかだったためであろう。同じ理由でアリューシャン列島で発達しなかったウミアックは、イヌイトが分布する全域にわたってみとめられるであろう。

カヤックと回転式銛を駆使して大型海獣、とりわけクジラを沖合で仕留める技術をもち、カヤックとウミアックを使いはじめたネオ・エスキモー文化が約2500年前に出現したことは、考古学的な研究によって示されている。

猟はカリブーを川や湖に追い込んで、川が狭くなっている所、あるいは地形が岬のように湖につき出した狭い場所を選び、見えない所でカヤックにのって待機していたハンターがカヤックを漕ぎ出してカ

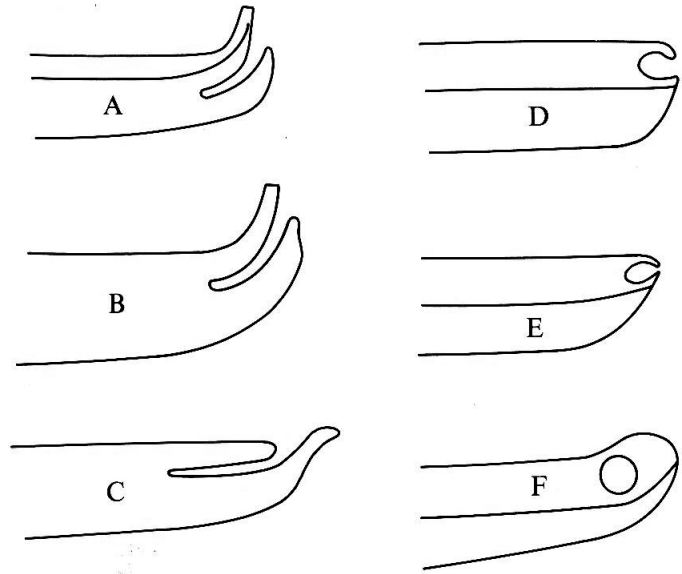


図1 アリューシャン列島およびアラスカのカヤック割れ舳先 (Johnstone 1980 : 33 による)



写真3 海氷上を走る犬ぞり（カナダ・ヌナブト準州、1997年4月、筆者撮影）

リブーを槍で刺した。向う岸では女性と子供が岸に上がろうとするカリブーを水に追い返して、ハンターと勢子の間を泳ぎ回るカリブーを仕留めた。

アリュートと同様に、男はカヤックに乗ってアザラシ、セイウチや水鳥を求めて海上狩猟にも出た。その時に着る防水服はセイウチなどの腸を縫い合わせて作った、半透明の防水服であった。

犬ぞり

アリュート文化にない、イヌイト文化の橇の歴史は必ずしも解明されていないが、少なくとも1000年以上前から橇は使われていたと推定されているが、イヌで橇を引いていたことを示す引き具（harness）は未発見である。

カナダやグリーンランドでは4000年前のイヌ骨が確認されているが、橇を引くと言うよりも、荷物を直接イヌに載せたとされている[スチュアート2009]。イヌが多く飼われるようになり、犬ぞりが普及するのは、およそ1000年前のことである。古い遺跡からは橇の部品と思われるものが見つかるが、これらの部品は人間が曳いていた橇である可能性もあり、犬ぞりであるとは断定できない。

高木が生育しない極北地帯では、伝統的な橇は動物の骨をつなぎ合わせる、あるいは動物の皮を棒状に丸めて水に浸してから凍らせた「丸太」からなる長さ1~2.5mの滑り板二本を用意する。二本を幅1~1.5mに並べて、その間にカリブーの角などで作った「横木」を5~6本を渡し、革紐でゆわいた。一本の長い曳き綱にイヌを一列につなげる森林地帯インディアンなどの犬ぞりとは異なり、イヌイットはイヌを扇状に橇につなげる。

「近代化」の波

アリュートとイヌイトの「近代化」はいつからはじまるのかについては、さまざまな解釈がある。アリューシャン列島ではロシアの毛皮商人が進出した18世紀後半、イヌイト社会では捕鯨船が入ってくる17世紀、あるいは毛皮獣猟が盛んになる18世紀からといえなくもないが、ここでは、定住村に移動させられ、児童の強制就学と、国民化政策が本格的に行われる20世紀中葉とする。

道具における近代化は、皮舟に代わりアルミ製やガラスファイバーのボートが普及し、犬ぞりはスノ



写真4 カヤックの骨組みを作る（カナダ・ヌナブト準州、1997年4月、筆者撮影）

ーモビルにとって代わられる結果となった。アラスカのイヌイトの社会では、皮張りのウミアックを模してキャンバスを張ったものが今でも使われているが、カナダとグリーンランドでは昔ながらのウミアックは姿を消している。アリュートの社会でもイヌイトの社会でもカヤックは猟に使われることもなく、スポーツ用に限られている。

近代化は道具への影響にとどまらず、両民族の社会関係に大きく響いている。

まず、道具である皮舟は現在、船外機などの発動機船に代わっているので、皮舟は博物館の注文などの依頼に応じて、古老の指導の下で作られるのみである。北アラスカでは、動物の皮の代わりにキャンバスを張ったウミアックが現在も作られているので、骨組みを組み立てる技術は継承されているが、動物の皮を処理して縫い合わせる人（女性）は少なくなっている。

銛などの海上狩猟具は現在もつかわれているが、金属製になり、獲物が絶命したあと沈まないようにするための浮き袋には、プラスチックのブイが使われている。伝統的に、獲物に接近して銛を打ち込む猟法は、遠くからライフル銃で撃ってから、船外機つき金属やプラスチックの船に代わった伝統的な「道具」は猟法・猟期や獲物の選択を変化させている[スチュアート 2006]。そうした物質文化への影響にまさるのが、社会関係への影響である。

ここで、「社会関係」には二通りあることに注意する必要がある。一つは、人と人、集団と集団の間という、一般的な社会関係である。もう一つは、人間と動物との社会関係、別の言い方では世界観である。

私の調査地域であるカナダ・イヌイトの事例をもって説明するが、似たような世界観は多くの採集狩猟民に知られており、伝統的なアリュート社会とも無縁な現象ではない。

イヌイト伝統社会においては、性分業があり、それはタブーによって規定されていた[スチュアート 1991、2000]。成人の男性は狩猟と漁撈、道具の製作と手入れ、住居の築造、移動する時期と移動先の決定などを担当していた。女性は衣服の仕立てと繕い、クジラやセイウチの巨大な獲物以外の解体と肉の分配、毛皮や皮の加工処理、植物の採集、食料の調理と加工、育児などを担当していた。ただし、男女は互いの仕事を熟知しており、すべての知識と技術を共有していた。必要があれば女性は犬ぞりを御したり猟をしたりしていたし、男性は縫い物をし、助産夫をも務める、というような具合なのである。男女の分業はタブーによって規定されていたが、タブーも状況次第で柔軟に解釈されていた。たとえば、

月経時の女性は狩猟道具を触ってはならないというタブーはあったが、飢餓状態において男性のハンターがいない場合、目の前に獲物が現われたら月経時の女性もその獲物を仕留める。性分業もジェンダーロールも、そしてそれらにまつわるタブーもあくまで理念であり、通常は遵守すべきものではあったが、社会全体の利害を度外視するほどまでに死守すべきものではなかった。

性分業をめぐる、イヌイト社会における男女関係は相互補完的であり、基本的に男性と女性は対等であったようである。

イヌイト社会では人間と動物は相互依存関係にある。動物はそれぞれの「世界」にいて姿形もなすことも人間と同じであり、同じような生活をしているが、人間の「世界」に現われたとき、毛皮、食料になる肉、道具の材料になる角などを身につけて運んでくる。人間の「世界」へ来てはまた自分の「世界」に戻らなければならないが、自分の力では戻れない。

ここでいつ動物が自分の世界に戻るのかという考え方は時間観念と深くかかわっている。直線的に経過する近代欧米社会の時間観念とは異なり、伝統イヌイト社会では時間が永遠に循環することによって宇宙的秩序がなりたっていたようである。森羅万象に宿るものの本質である魂（イヌア=inua）が常に巡りまわることによって循環サイクルが再生され、宇宙的秩序が維持されるという世界観である。再生を象徴する女性の役割が重視されるゆえんがここにある。魂の数が開闢以来決まっており、一つの魂が循環できなくなれば、魂、ひいては存在そのものは永久に世の中から消滅する。

動物が自分の「世界」へ無事に戻るためには、人間の手によって肉体から魂を解放してもらわなければならないが、解放してもらった見返りに、人間に毛皮や肉を与えるのである。つまり、毛皮や肉などの手土産を携えて人間の「世界」へ現われ、正しい儀礼に則^{のつと}って自分の「世界」へ確実に戻してくれる人間を選び、自らを獲らせるのである。その意味で、動物は人間の心の中まで覗いて、行動も考えも正しい者を選ぶ。人間と動物は相互依存していると前に書いたが、イヌイトの立場からすると動物の方がやや上手であると考えられている。動物は、動物を敬い、決まったしきたりに則^{のつと}った扱いをしてくれるハンターを選ぶからであり、動物の鋭い感性を人間はごまかすことができない。ところが、実際はハンターを選んでいではなく、ハンターの妻に動物が自らを任せていると解釈されている。その理由は、次のように説明される。

イヌイトの世界観には、冬と夏、男と女、陸と海、月と太陽などという二元的な対立関係からなる構造が知られている。生を象徴する女性が獲物を解体することは肉体から動物の魂を解放する行為、すなわち再生させることを意味し、肉を分配することは豊穡を表現している。男性が使う銛はペニスを表現し、子宮と見なされる家に獲物の肉を持ち込むことは生殖行為を象徴的に表わしているのである。すなわち、銛で仕留めたアザラシを家に運び込んで女性が解体することは、獲物を子宮へ戻すという、再生サイクルの一環を象徴している。

現在では、動物とのこのような社会関係はほとんどなくなり、男女の領域を区別する欧米のジェンダー観が定着している。また、船外機つきボートやスノーモービルという近代の機械類は獲物の選定や猟法にとどまらず、生業活動の安全性にも影響している。犬ぞりの場合、海氷上の猟では氷が薄くなっている、割れ目がある所をイヌが避けるので、海に落ちる事故はあるていど防げる。また、イヌと橇は長い引き綱でつながっているため、イヌが海に落ちて人間はその危険を避けることができる。さらに、悪天候に見舞われれば、イヌを抱いて体を温める、いざとなればイヌを食べて飢えをしのげた。スノーモービルは食べられない！

近代化は、自然環境に関する伝統的な知識継承が伝わらなくなっている要因にもなっている。機械を過信して自然環境の兆候を正しく読まないことによる事故がこの数十年の間に増えている。

まとめ

あまりにも言い古されていることであり、あらためて指摘するのははばかれるが、アリュートとイヌイトにとって、近代化は諸刃の剣である。環境に適した材料で作った道具が金属や化学製品に代わり、自然環境との距離ができたため、伝統の技術と知識が廃る傾向にある。一方、平均寿命は100年前の40歳前後から、2000年には男性64歳、女性70歳に伸びている。

暖房完備の洋風の家で衛星テレビを観、どんな小さな村にもある、商品豊富な店で食料などを買うという「近代」の生活から伝統的な生活に戻る気配は皆無である。

そこで、昔ながらの道具と、道具にまつわる作製の技術と知識を保存していく意義はなおさらの大切なことであろう。

参考文献

スチュアート ヘンリ

1991 「食料分配における男女の役割分担について：ネツリック・イヌイト社会における獲物・分配・世界観」『社会人類学年報』17：115-128、東京：弘文堂

1993 「イヌイトか、エスキモーか：民族呼称の問題」『民族学研究』58-1：85-88

2000 「カナダ・イヌイト社会の分業と男女関係：ジェンダー今昔物語」『アンペイド・ワークとは何か』（川崎賢子、中村陽一編）208-224、東京：藤原書店

2009 「イヌイトの犬橇文化」『家畜の文化』（秋篠宮文仁、林良博編）、東京：岩波書店

長谷部一弘

1995 「アリュートの皮船」『北方民族の船：北の海のすすめ』45-48、網走：北方文化振興協会
ダイソン、ジョージ

1992 『バイダルカ ザ・カヤック』東京：情報センター出版局

吉田悟朗

1995 「バイダルカ実測図」『北方民族の船：北の海のすすめ』49-50、網走：北方文化振興協会

Adney, Edwin, Howard Chapelle

1964 *The Bark Canoes and Skin Boats of North America*, Washington, D.C. : Smithsonian Institution

Johnstone, Paul

1980 *The Sea-craft of Prehistory*, London : Routledge

Zimmerly, David

1986 *Qajaq : Kayaks of Siberia and Alaska*, Anchorage : Alaska State Museum